

---

# 小心者が逝く

サンドマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小心者が逝く

### 【Nコード】

N7262X

### 【作者名】

サンドマン

### 【あらすじ】

高校受験を控えた主人公上条颯真は目を覚ますと目の前には荒野が広がっていた。

そこには三人の変な女の子と、下敷きになってる男がいて……。

### 注意

作者は小説の書き方を知らないド素人です。

さらにオリジナル展開やオリキャラ、アンチ等があります。  
こんな駄文でも構わないよと言う方だけ読むことをお勧めします。

**小心者が来た前編（前書き）**

主人公上条颯真は小心者です。

基本的に長いものに巻かれる主義です。

これは主人公が、死なないように頑張るお話です。

## 小心者が来た前編

初めまして俺の名前は上条颯真と言います。受験生の俺は明日受験する高校に遅刻しないように早めの就寝を取った。そして目が覚めた俺はなんやかんやあつて今皿洗いをしている。

上条「なんでこんな事を・・・」

すまん、なんやかんやじゃ分からないな、きちんと話そう

## 第一話小心者が来た前編

家で寝ていた俺が目を覚ますとそこには辺り一面荒野が広がっていた

上条「・・・・・・・・・・」

え、なにこれ？なんで俺こんな所に居るの、て言うか時間！

??「あ、あのー」

受験初日に遅刻とか死んでもしたくない。

??「あのちよつと・・・」あれ、時計がない。て言うか家がない  
!!!。

上条「ここどこだ!？」

??「あの、すみません!!!」

上条「うおじゃ!?!？」

ただ誰だいきなり、びっくりして変な声出ちゃったじゃないか。

「.....」

上条（・・・何だこの娘たち）

目の前には変わった格好をした三人の女の子が俺を凝視していた。

上条（劇団の人か？武器みたいなもの持っているし）

??「えーっと・・・大丈夫ですかあ？」

そうこう考えてると桃色の髪をした娘が心配そうに話し掛けてきた。

上条「あ、えっと、だっ大丈夫だと思いますハイ・・・」

俺は戸惑いながら応えた。

桃色「ホッ。良かったあ〜」

上条（そうだ、この娘に聞けば分かるだろ）

上条「あの、つかぬことお聞きしますが・・・」

桃色「はい？」

上条「ここはどこなんでしょうか？」

桃色「へ？」

上条「朝のこの時間帯に車どころか人っこ一人見当たらないんですけど……」

桃色「……」

上条「もしかして日本じゃない、とか……」

桃色「にほん？」

上条「??」

桃色「??」

おかしい……意味が通じてないような……

桃色「それよりも下の人は大丈夫ですか？」



・・・下の人？

??「お、重い・・・」

うわっ！なんで俺人の上に乗ってるんだ！？

上条「すすすいません今どきます！」

下敷き男「ったく、ひどい目にあった」

上条「すいません・・・」

俺の下敷きになっていた人は忌々しそうに嘆いた。

下敷き男「で、ここはどこなんだ」

下敷き男は周りを見渡した

黒髪「ここは幽州啄郡。五台山の麓だ」

は？、幽州って三国志で出てくる地名じゃないか・・・三国志？

上条「幽州・・・です、か？」

桃色「そうだよ。それよりそっちのお兄さんの服、すごいね」

赤髪「キラキラ輝いてるのだ！」

確かに凄い光ってるな・・・何でできてるんだ？

下敷き男「ん？、そりゃあポリエステルで出来てるからな」

え？、ポリエステルの服？。

あれ、なんか頭に引つかかるな。

下敷き男「ところで君たちの名前聞いてもいいかな

劉備「私の名前劉備玄德だよ」

張飛「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

関羽「我が名は関羽雲長と言つ」

関羽！張飛！？

これってまさか！！

北郷「俺は北郷一刀。聖フランチェスカ学園に通っている」

「北郷一刀おおお！！」

北郷「うお！何だ、いきなり！」

上条「す、すみません知り合いと名前が似ていて驚きまして……」  
間違いない、これ恋姫無双だ。

……でも関羽と張飛は分かるけど劉備はなんで居るんだ？  
確か出てなかったはずだけど？

北郷「……まあいい。

それでお前は？」

上条「あつ、俺は上条颯真と言います。受験生です」

もしかしてこれ真恋姫無双なのか？

確か新キャラが大量に出るって宣伝してたし。

北郷「そうか。それより劉備、関羽、張飛ってそれ本名なのか？」

劉備「ホントホント。私たち嘘つかないもん」

劉備は楽しそうに答えた

北郷「・・・まさかタイムスリップか？」

劉備「ねえねえ、今度は私たちから質問してもいいかな？」

北郷「え、ああ構わないよ」

劉備達は少し悩む素振りをして聞いた

劉備「それじゃあお兄さん達はどこから来たの？」

北郷「さあ？気がついたらここにいたかな」

上条「・・・俺も一緒です」

関羽「ではあなた達どこの出身でしょうか？」

北郷「日本の東京」

上条「・・・日本の福島県です」

鈴々「お兄ちゃん達いつたい何者なのだ！」

北郷「何者って日本人としか言えないな」

上条「そう、ですね」

すると劉備は目を輝かせた

劉備「ねえ愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、この人達もしかして天の御遣い様じゃないかな！」

上条（・・・やっぱりここでも天の御遣いがあるのか・・・）

北郷「何だ？その天の御遣いつて？」

劉備「天の御遣いって言うのはこの乱世を平和へと導く方のこと  
です御遣い様」

劉備は嬉しそうに答えた

関羽「桃香様、あのエセ占い師の予言を信じてるのですか？」

劉備「もちろん だって流星が落ちた所にこの人達がいたんだから

」

張飛「でも占いじゃひとりの天の御遣いがくって言ってるのだ。お  
兄ちゃん達は二人いるよ」

・・・は、何それ、どういふこと、ひとりのみ天の御遣いって。

上条「それってどういふ・・・」

グウ

全員が音の主へと目を向けると・・・

北郷「悪い、起きてから何も食べてないからつい」

劉備「そう言えば私たちも食べてないね」

鈴々「鈴々お腹ぺこぺこなのだ！」

関羽「でわ、近くの街で食事を取ることにしてしましょ」

上条「……………」

仕方ない、天の御遣いについては後で聞くことにするか。

俺達は近くの街の酒家へと向かった。

**小心者が来た前編（後書き）**

長くなりそうなので、二つに分けることにしました。

こんなことで大丈夫か？



小心者が来た後編（前書き）

失敗した・・・前半と比べて後半が長くなってしまった・・・

今後このようなことはないよう気おつけます。

## 小心者が来た後編

あれから数里ほど歩いき、街へとついた俺達は食事を取りながら、劉備達と話をしたんだ。

劉備「それでね、北郷様。さっきも説明した通り、私達は弱い人たちが苦しんでいるのを助けたくて、今まで旅を続けていたんですが・・・」

関羽「宦官たちは私腹を肥やし、賊が横行している昨今」

張飛「鈴々達だけじゃ限界なのだ・・・」

劉備「だからお願いします!! 私達に力を貸してください!!」

やっぱりこういう展開になるんだ・・・

北郷「俺が、天の御遣い・・・」

劉備「御遣い様!! お願いします!!」

劉備は大きな目で北郷を見つめた

北郷「・・・わかった。

どこまで出来るか分からないけど、俺で良ければ協力しよう!」

すげえ、流石主人公。即断即決かよ・・・

劉備「本当ですか!?! やったよ愛紗ちゃん御遣い様が協力してくれるって!」

愛紗「ハイ!。北郷様、これからよろしくお願いいたします」

北郷「ああ!。天の御遣いの俺にまかせてくれ!」

劉備さん、嬉しそうだな・・・

北郷さんもノリノリだし・・・

張飛「そっちのお兄ちゃんはどうするの?」

上条「え!?!」

俺は・・・

上条「俺も、協力します・・・」

上条はしびしびといった様子でつぶやいた

劉備「上条様もですか！？ありがとうございます。これで百人力です！」

関羽「上条様もよろしくお願いします」

上条「よろしくお願いします・・・」

そして俺は劉備さん達と行動をとる事となった・・・

第二話小心者が来た後編

その後食事の支払いをしようとしたが、お金が足りず、俺達は今店の手伝いをしている。

女将さん「こら!!サボるんじゃないよ!!」

上条「ハイ!、すみません!!」

いったいいつ終わるんだよお。

劉備「はあ~~~~・・・疲れたよ~~~~」

関羽「全くです。戦場で槍を持つならば疲れなどしないのですが・・  
」

女将さん「はっはっはっ。厨房だって女の戦場なんだ。それにこんなんでへこたれてたら、これから先人助けなんて出来ないよ?」

北郷「え？」

女将さん「厨房であんたらの話が聞こえちゃってね、・・・応援してるよ、お嬢ちゃんたち」

張飛「ううー。それなら皿洗いは勘弁して欲しかったのだー・・・」

女将さん「それはそれさ。人間堂々と生きて歩くためにゃ、ケジメってやつが必要なんだ」

そう言いながら、女将さんは

女将さん「ほら、こいつを持っていきな」

と、瓶のようなものを取り出した。

女将さん「こいつはうちで扱ってる酒さ。大望を抱くあんたらの門出の祝いにやるよ」

関羽「女将」

女将さん「あたしも今ご時世には嫌気がさしてるんだ。・・・期待してるよー!」

張飛「任せろなのだー!」

女将さん「頼もしいねえ・・・それで? あんたら、この先行くあてはあるのかい?」

関羽「それは・・・」

劉備「まだ決まってるません・・・」

女将さん「それならこの近辺を治めてる公孫蒼様のところに行ってみな。義勇兵を募集してるから」

劉備「そう言えば白蓮ちゃんがこの辺りに赴任するって言ってた!」

関羽「・・・桃香様。そういうことはもっと早くに仰ってください」

関羽は呆れながら言った

劉備「うう、ごめんなさい・・・」

張飛「お姉ちゃんは天然過ぎるのだ。・・・それでどうするのだお兄ちゃん達」

北郷「ん？」

上条「え？」

張飛「お兄ちゃん達は鈴々達の主人になったんだから、行き先を決めるのはお兄ちゃん達の仕事なのだ」

北郷「主人？、俺が？」

上条「主人て・・・」

いきなり言われても・・・

関羽「そう・・・ですね。

鈴々の言う通り、あなた方は我らのご主人様だ」

劉備「じゃあご主人様。白蓮ちゃんのところに行っても良いかな？」

北郷「ああ、じゃあ行こうか！」

上条「俺もいいと思います・・・」



そして俺達は公孫賛の本拠地へと出発した。

――その途中――

劉備「これが桃園かー、すごいね」

関羽「美しい・・・まさに桃園の名にふさわしい美しさですね」

張飛「きれいなのだ」

北郷「すごい・・・桜みたいだな」

上条「・・・・・・」

すげえ、これが有名な桃園の誓いの桃園か・・・  
なんか、クルモがあるな。

張飛「さあ酒なのだー！」

ワクワクした様子の張飛が俺達の周りをクルクル走り回る。

関羽「・・・約一名、ものの雅を分からぬ者がいるようですが」

劉備「鈴々ちゃんらしいね」

北郷「だな。・・・ま、いいや。みんな準備は良い？」

劉備「うん」

関羽「はっ!」

張飛「良いのだ!」

上条「ハイ・・・」

北郷「じゃあ、初めようか」

その言葉を聞いた劉備達は、盃を空に向かって高々と掲げた。

関羽「我ら五人っ!」

劉備「姓は違えども、姉妹の契りを結びしからは!」

張飛「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ！」

関羽「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

上条「ね願わくば同年、同月、同日に死せんことを」

北郷「乾杯！」

こうして俺は戦乱の世へと足を踏み入れたんだ・・・

小心者が来た後編（後書き）

主人公の世界では真恋姫無双はまだ発売されてません。

なので主人公の知識は恋姫無双までです。

こんな主人公で大丈夫か？

## 小心者決意する（前書き）

主人公は劉備軍の中で一番年下です。

なので基本話す時は、さん付けの敬語です。

## 小心者決意する

桃園の誓いを終えた俺達は公孫贄の下へと向かうが、辺りが暗くなってきたので森で野宿することした。

そして俺は、見張りをしながらこれからのことを思い浮かべた。

## 第三話 小心者決意する

上条「……………」

俺と北郷さんは、これから天の御遣いとして、劉備さん達を導いて  
いかなければならない・・・

上条「・・・・・・・・」

多分劉備さんに天下を取らせる事でこの物語は終わりへ向かうんだ  
ろう・・・

上条「・・・・・・・・」

恋姫無双がそんな感じだったし、  
この世界でも同じような流れで進むんだろうな・・・

上条「・・・・・・・・」

そして沢山戦争して、苦しみ悶えて・・・

俺は死ぬんだ・・・

上条「・・・イヤだ」

なんで俺が天の御遣いなんだよ！？御遣いは北郷だけだろ！？俺は関係ないじゃないか！？

なんで俺が劉備に天下取らせなきゃいけないんだよ！！俺になにが出来る？字が読めなけりゃ強くもない。どうすりゃいいんだよ！？

なんで俺が戦争しなきゃいけないんだよ！！戦争で一番多くの罪を背負うのは指揮官らしいじゃないか。したくもない戦争してなんで責任は全部俺が背負わないといけないんだ！？

上条「・・・う・・・うう・・・」

なんで俺はここにいるんだよ！？主人公の北郷がいるんだから俺は必要ないじゃないか！！俺になにを期待してるんだよ！？



頭の中はこれから起こると思われる苦痛への絶望感で一杯になっていた

上条「・・・帰りたい」

張飛「どうしたのだ、颯真のお兄ちゃん」

上条「!？」

な、なんだ、張飛か。もう交代の時間か・・・

上条「いえ、ちょっと考え事をしていただけです。気にしないでください」

張飛「・・・泣いてたのだ」

上条「何でもないんです。・・・見張りのほう、お願いします」

俺は何もなかったかのように眠りに付こうとした

張飛「・・・帰っちゃうの?」

上条「・・・」

張飛「颯真のお兄ちゃん、天の国に帰っちゃうのか?・・・」

上条「・・・帰りませんよ」

張飛「でも、帰りたい、って今・・・」

上条「・・・るわけ・・・う」

張飛「え?」

上条「帰れるわけないでしょう。  
だって帰り方分からないんですから!!」

張飛「……………」

上条「帰りたいですよ!!そりゃあ。

こんな訳わかんない世界にいきなり来て天の御遣いになれって言われて嬉しいわけないだろう!?!」

止まらなかった。俺は張飛に今までの不満を叩きつけるようにして叫んだ

張飛「でもあの時お兄ちゃん協力するって言ってたのだ」

上条「あの状況で協力しねえなんて言うヤツいねえよ!!」

張飛「じゃあ……ウソなのか?」

上条「……俺はあんたみたいに強くないし、頭も良くない……俺は役立たずなんだよお……」

……俺はもうダメだ、本音をぶちまけたし張飛に失礼なことしてるし……明日俺、捨てられるのかな……

張飛「…………お兄ちゃんバカなのだ」

上条「んだよ……」

ダメだ。涙が止まらない……俺も……

張飛「お兄ちゃんが弱いとかバカとかそんなの関係ないいいのだ。

だって……

鈴々も役立たずだったから」

上条「え？」

張飛「鈴々昔はすつごく弱かったのだ。

泣いてばかりで、とと様とかか様のこといつも困らせてたけど、鈴々幸せだったのだ・・・

でもある日、村に盗賊達攻めて来たんだ。

鈴々を守るためにとと様とかか様は・・・」

上条「・・・」

張飛「その後愛紗に会ってお姉ちゃんに会って一緒に旅したのだ。」

何だよ

張飛「鈴々弱かったから、役立たずだったから二人が死ぬ時何も出

来なかった。

だから愛紗にお願いして鍛錬を付けてもらったのだ。」

止めるよ

張飛「いろんなところで盗賊を倒して、村や街の人達い〜〜パイ  
笑顔にできたのだ。」

上条「止める！」

張飛「鈴々役立たずじゃなくなった・・・

お姉ちゃんや愛紗、た〜くさんの人達を守るようになったのだ

・・・だから大丈夫だよ。

お兄ちゃん。」

上条「・・・」

張飛「バカで弱い鈴々が強くなったみたいに、バカで弱いお兄ちゃんもきつと強くなれるのだ。」

・・・それまで鈴々が守ってあげる」

上条「・・・うっ・・・うっ・・・」

何だよ。

何だよそれ。

何でこの人こんなに頑張ってるんだよ・・・

上条「・・・なんでそこまで頑張れるんだよ・・・」

張飛「・・・鈴々決めたの。

とと様とかか様が死んだ時、もう無くさないって

鈴々の大好きな人達みくんな守るって。みんなが死んだら怖いから、頑張れるのだ！」

・・・俺も

上条「・・・俺、できる、がな・・・」

俺もこの人みたいに・・・

張飛「危なくなったら鈴々が助けてあげる！」。

だから頑張ってみよう？

お兄ちゃん

俺は生まれて初めて泣き崩れた・・・  
涙が止まらなかったんだ

上条「・・・グズツ・・・頑張つて、みまず・・・張飛さん」

なりたい

張飛「鈴々」

上条「え？」

張飛「張飛じゃなくて鈴々なのだ」

上条「でも、それって真名じゃ・・・」

張飛「良いの！一緒に頑張っていく仲間だから」



・・・凄いな、やっぱり・・・

上条「じゃあ、これからよろしくお願いします鈴木さん」

張飛「おう」

この日、俺は尊敬する人とともに頑張っていくことを誓った。

小心者決意する（後書き）

作者は鈴々が大好きです。

天真爛漫なことか、純粹なことか、無邪気なところが特に・・・

イヤ、ロリコンじゃないんですよ。本当に

小心者提案する(前書き)

他の作家さんが書いた作品は面白いですね  
自分より上手い人ばかりで泣けてくる(ノ T)

## 小心者提案する

夜が明け、朝になり全員が目覚めて少し経った今、俺は劉備さんに  
気になってることを聞いてみた。

上条「あの、劉備さん」

劉備「なに？ご主人様」

上条「えっと、天の御遣いについてなんですけど・・・  
占いの内容詳しく教えていただけませんか？」

そう、昨日鈴々さんが占いについて気になることを言ってたんだ。

劉備「いいよ えっとねえ。」

「黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流星。その流星は一人  
の天の御遣いを乗せ、乱世を鎮静す」だったかな」

やっぱりか、変な一文がついてるよ・・・

上条「それなんですけど、占いでは一人の御遣いが言ってるわけですが、俺と北郷さんで二人いるわけじゃないですか？」

そうなんだ、占いを聞く限り天の御遣いは一人だけと言うことになる。

関羽「そう言えば、おかしいですね」

北郷「占いの内容が少し間違っただけじゃないか？」

上条「ですが世間では一人として定着してるんです」

だから俺は、

上条「なので提案なんです、

天の御遣いは北郷さん一人と言うことにしませんか？」

天の御遣いを止めることにした。

#### 第四話 小心者提案する

劉備「え？なんでそんなことを」

劉備は戸惑いの表情で尋ねた。

上条「先ほど説明したように、世間では天の御遣いは一人と言う認識をされています。ここで俺と北郷さんの二人が天の御遣いを名乗ると、矛盾が生まれてしまいます。なので天の御遣いは占い通り、北郷さん一人にした方が都合が良いでしょう」

それに北郷さんは本物の御遣いだし問題ないだろう。

すると張飛が怒った表情で近づいてきた。

鈴々「颯真のお兄ちゃん鈴々との約束破って逃げるつもりなか!？」

上条「そんなわけないでしょう!!俺は鈴々さんのこと裏切ったりしません!!」鈴々さんは俺の尊敬する人なんだから!

上条「俺が言いたいのは、二人も御遣いがいるのはおかしいから片

方が平民になれば良いと言ってるんです」

鈴々「？」

張飛はよく分からないのか難しそうな顔をしている

上条「つまり、俺を劉備さんの臣下にしてもらいたいんです」

その言葉に本人以外の全員が啞然とした表情をした。

上条「それで俺が名乗る名前ですが・・・」

劉備「ちょちよつと待って！ご主人様はそれで良いの！？」

劉備は驚きに満ちた表情で詰め寄った

上条「・・・劉備さん、天の御遣いの名を利用するにはこれが一番良い方法なんです」

劉備「でも・・・」上条「立場は変わりますが、劉備さんに協力する事には変わりませんお願いします劉備さん」

劉備「・・・わかったよ。それに上条様が天の御遣い様であることには変わらないもんね」

劉備は安心したように笑って言った

上条（・・・なんか引つかかる言い方だな）

上条「ありがとうございます。  
皆さんもよろしいですか？」

鈴々「鈴々は颯真のお兄ちゃんが約束破らないことがわかったから  
良いのだ！」

張飛は安心したように笑い

関羽「上条殿のお心感服致しました。上条殿の思うようになさってください」

関羽は関心したように頷き

北郷「俺もそれで良いよ」北郷は納得した表情で答えた

上条「では、俺はこれより姓は簡、名は擁、字は憲和、真名は颯真と名乗ることと致します。



それから我が真名をお受け取り下さい」

こうして上条颯真は劉備軍の臣下、簡擁憲和となったのである

劉備「そう言えば颯真さん、鈴々ちゃんの真名を呼んでたけどいつ教えたの？」

劉備は気になる様子で尋ねた

鈴々「昨日の夜、見張りを交代した時なのだ」

北郷「真名って何だ？」

北郷は不思議な表情で尋ねた

関羽「真名とは、家族や親しき者しか呼ぶことを許さない神聖なる名です」

劉備「だから親しい人以外は、例え知つていても口に出してはいけない本当の名前なんだよ」

北郷「神聖な名、か・・・」

劉備「それじゃあみんなで真名を預けようか」

桃香「私は桃香」

愛紗「我が真名は愛紗です」

鈴々「鈴々は鈴々なのだ！」

颯真（桃香様、愛紗さん、鈴々さん）

静かな森の中で俺は三人の名前を思い浮かべた。

## 初心者提案する（後書き）

簡擁の擁の字が違いますがすみません。

検索してもこの字しか出ないのでこれで簡擁と言ったこととして下さ  
い、お願いします。 f ^ | ^ ;

文才が欲しい・・・

小心者幻滅する(前書き)

作者は魏ルートと呉ルートの一刀くんが大好きです。

だが燭ルートてめえはダメだ。

## 小心者幻滅する

公孫贇伯珪。桃香様は私塾で出会い親友になったそう。ちなみに、成績は優秀だったらしい。桃香様は・・・

公孫贇様の居る町へ着いた俺達はまず情報を集めることから始めた。というのも。いくら友人だからと言っても、一太守がそれだけで逢ってはくれないだろうと、北郷さんが言ったからだ。

そして、今は酒家でそれぞれの集めた情報を交換している。

北郷「と、いうわけで情報をまとめると、この辺りに巣くう盗賊の数は約五千人と云った所か」

愛紗「対する公孫贇軍は約三千人。・・・相手が賊軍だからと言っても、この差は大きいですね」

北郷「そこでだ、最も重要になってくるのが、部隊を率いる将の質だと思っただが」

颯真「確かに、公孫贇様の軍には勇猛な将がいないと聞きますし」

でも最近誰かが仕官してきたらしいけどもしかして……

北郷「そつだ。……ところで、愛紗たちって兵を率いた経験がある？」

鈴々「無いのだ！」

鈴々さん、そんな自信満々に答えなくても……

北郷「そつか……」

桃香「でもねでもね、愛紗ちゃんに鈴々ちゃんなら兵隊さん達を手く率いられると思うよ」

北郷「でもそれが本当だとしても、現状じゃただの腕自慢として見られちまう」

桃香「うう、それはそつだよね……ならどつすれば良いんだろう？」

鈴々「簡単なのだ！公孫贖のお姉ちゃんのところへ行くときに兵隊を連れて行けば良いのだ！」

颯真「そうですね。少しでもいいので。とにかく兵士を連れて合流するのが重要でしょう」

兵を連れて行けば力を誇示出来るからな

愛紗「それはそうですが、一体どうやって？」

颯真「・・・お金で雇うのはどうでしょう」

愛紗「お金、ですか？」

颯真「はい、お金で兵を雇うのが一番手っ取り早いですし」

鈴々「でも鈴々達はお金持って無いのだ・・・」

颯真「では、これをつかきましょう」

俺は懐からある物を取り出した

第五話 小心者幻滅する

北郷「筆箱か？」

颯真「はい、ですが使つのは中の物です」

桃香「なあに、そのほそつこいの？」

颯真「これはボールペンと言っています、**墨を摺らずに字を書くこと**が出来るといふ道具で、こつこつたー」

俺は手のひらに渦巻きを書いた

颯真「物です」

桃香「すっごーい！文字が書けてるー！」



愛紗「さすが天の世界、摩訶不思議なものがあるんですね」

鈴々「スゴイのだー。お兄ちゃんそれ鈴々にちょーだい！」

颯真「いいですよ。十本ほどあるので一本差し上げます」

鈴々「にゃー！やったのだー！」

張飛は貰ったペンをキラキラした目で見つめた

颯真「これ売ってお金にすれば、かなりの金額になるでしょう」

桃香「そのお金で兵隊さんを雇うわけだね」

颯真「ええ、どれほどの兵を揃えられるかは、わかりませんが」

愛紗「では、私が売って「ちょっと待った」」

颯真「どうかしましたか？北郷様」

なんだ？何か問題でもあったかな？

北郷「それよりもいい手がある」

颯真「いい手？一体なんですか？」

北郷「兵を雇うんじゃないやなく集めるんだ。」

愛紗「どうゆうことですか？」

すると北郷は自信満々に

北郷「兵隊の振りをさせればいいんだ。公孫贄に会うまでな」

驚くべきことを言い放った

え？、ちょちょっと待ってそれって・・・

桃香「んーと・・・？」

北郷「つまり、公孫贄の城に行くまで、兵隊の格好して付いてきてもらってこと。」

そうすりゃ門番とかから俺達がたくさん兵を率いて訪ねてきたっ

て、公孫贄に伝わるだろ？」

愛紗「あ……」

まさか……

北郷「俺の意図、分かった？」

愛紗「……はい。……ですが、それは……」

颯真「騙すと言うことですか」

俺はこの時信じられなかった。北郷一刀さんがこんなバカな案を提案するとは……

北郷「いい案だろ？。兵隊を雇うよりも多くの兵を集められるし、少ない金で出来るしな」  
ダメだ！それだけは

颯真「い、いけません。公孫贄様にとって、兵は今喉から手がでるほど欲しいモノなんです！」  
俺は北郷さんに詰め寄り、意見した

颯真「そんなことをすれば、お、俺達全員罪に問われてしまいます」

その言葉に北郷は不機嫌になった

北郷「オイ、俺は天の御遣いでお前の主人なんだぞ、ただの臣下が逆らうのか？」

颯真「それは・・・」

一体、どうすれば

鈴々「お姉ちゃんはどつするの？」

桃香「私!？」

!!桃香様

劉備は悩んだ

桃香「私は・・・」

そして悩んだ末に

劉備「ご主人様に、任せるよ」

御遣いを選んだ

北郷「そうか！桃香は俺を信じるんだな。颯真これで文句ないな？」

桃香様・・・

颯真「・・・はい」

桃香様を選んだならしょうがない。俺は二人の臣下なんだから。

北郷「みんな心配するな、天の御遣いの俺がいるんだ。上手くいくさ」

北郷は偉そうに言い放った

桃香「そう、だね。ご主人様がいるんだもん、大丈夫だよ！」

劉備は必死に三人を励まそうとするが

愛紗「御意・・・」

鈴々「にゃー・・・」

颯真「そうですね・・・」

三人の心は不安で一杯だった。

小心者幻滅する（後書き）

物語のペースが思ったより遅い・・・

完結出来るだろうか・・・（――・）

## 小心者公孫贊に会う（前書き）

主人公は劉備軍の人には「俺」ですがそれ以外では「私」で話します。



## 小心者公孫贄に会う

愛紗さんが売ったボールペンのお金は結構な金額になった。

そのお金で偽装兵を百人ほど集め、城に来た俺達は玉座の間へと案内されている。

颯真（・・・大丈夫かな・・・）

黙々と歩く桃香様達とは違い俺の足取りは重かった。

颯真（殺されるかもしれない・・・）

集めた兵はもう散り散りになっただろうし嘘を誠にすることは出来ない。

でも・・・もしかしたら

颯真

北郷様の主人公補正でなんとかなるかもしれない。主人公ってそういうもんだし・・・

颯真（不安だ・・・）

玉座の間へと向かうあいだ、俺は神に祈りを捧げ続けた。

## 第六話 小心者公孫賛に会う

公孫賛「桃香！ひっさしぶりだなー！」

桃香「白蓮ちゃん！きゃー！久しぶりだねー」

公孫賛「廬植先生のところを卒業して以来だから、もう三年ぶりかー。元気そうで何よりだ」

桃香「白蓮ちゃんこそ、元気そうだね それにいつの間にか太守様になっちゃって。すごいよー」

公孫賛「いやあ、まだまだ。私はこの位置で止まってなんかいられないからな。通過点みたいなもんだ」

桃香「さっすが秀才の白蓮ちゃん。言うことがおつきいなー」

公孫賛「それより桃香はどうしてたんだ？全然連絡取れないから心配してたんだぞ？」

桃香「んとね、あちこちで色んな人を助けてた！」

公孫賛「ほおほお。それで？」

桃香「それで、つて？  
それだけだよ」

公孫賛「……………はぁ……………!？」

桃香「ひゃん!？」

公孫賛「ほんとにそんなことばっかやってたのかつ!？  
お前一人頑張っても多寡が知れてるだろうに……………」

桃香「そんなことないよ？私にはすっごい仲間がいるんだもん」

公孫賛「仲間？」

それまで話しっぱなしだった公孫賛が関羽達の存在に気付く。

公孫賛「仲間って言うのはこの四人のことか？」

桃香「そつだよ。関雲長、張翼徳、簡憲和、そして天の御遣いの北郷一刀様！」

公孫賛「天の御遣いってあの？」

桃香「そ、流星と共にやってくるって言われてる方だよ」

公孫賛「こいつが・・・？」

公孫賛が北郷を見る。

北郷「よろしくな！」

北郷は笑顔で手を差し伸べた。

公孫賛「よろしく・・・」

それより、さつき門番から聞いたんだが、けっこつな数の兵を連れ

てるらしいな？」

颯真（来た！）

その言葉に劉備は動揺した

桃香「う、うん、白蓮ちゃんが盗賊退治のために義勇兵を募集して  
るって聞いたからお手伝いしようと思って・・・」

公孫賛「そりゃあ助かる！。兵も将も足りなくて困ってたんだ」

桃香「そう、なんだ・・・」

公孫賛「で？」

桃香「で、でって何かな・・・」

公孫賛「本当はもつと少ないんだろ？」

桃香「へ？」

公孫賛「桃香の態度を見れば分かる。だけど私に対してそういう小  
細工はして欲しくないな」

桃香「白蓮ちゃん……」

公孫賛「それで、何人なんだ？」

桃香「その……」

頼む、穏便に済んでくれ頼む！

桃香「実は……一人もいなくて……」

公孫賛「へ？……」

この瞬間世界が止まった。

公孫賛「……それって……」

桃香「あのね、私達兵隊さんを雇うお金がなくて、それで」

公孫賛「……………」

桃香「…………偽物の兵隊さんを集めたの……………」

公孫賛「…………そうか」

あ…………

公孫賛「良いさ。私だって、桃香たちと同じ状況なら、そういう作戦を立てたと思う」

この人…………

公孫賛「だけど友としての信義をないがしろにする者に、人がついてくることは無いぞ」

ダメだ

桃香「うん…………ごめんね、白蓮ちゃん」

これで終わったら

公孫賛「もういいって。それで後ろの四人は「私です！」」

公孫賛様は・・・

颯真「私が偽装兵を桃香様に提案したのです！」

桃香「え・・・」

公孫賛「お前が、桃香に？」

颯真「はい」「怖い」

公孫賛「済んだことだが、わざわざ名乗り上げるといふことは・・・  
相応の覚悟があるんだろうな？」

公孫賛は睨み付けながら言う

颯真「はい」



恐怖で鼓動が早まり手が震える。

「違う」と一言いえばこの恐怖から解放されるのに。

公孫賛「……そうか、では今夜私の部屋に來い……一人でな」

でもダメだ

颯真「……はい」

誤解されたままではいるのは

桃香「待って！白蓮ちゃん」

劉備は颯真を庇おうと前に出た。

桃香「颯真さんは」

公孫賛「桃香、ここまで大々的に宣言しておいて、お咎めなしは通らない」

桃香「違うの！そうじゃなくて」

颯真「桃香様。公孫賛様にも面子がございます。ここはお任せを」

桃香「でも……」

颯真「大丈夫です」

桃香「……颯真さん」

劉備は口惜しそうに後ろへ下がった

公孫賛「さて、日も来れて来た、今日はゆっくり休んでくれ」

公孫賛は部下に劉備達を部屋へと案内させた。

小心者公孫贊に会う(後書き)

ハム、かわいいよハム。

次回颯真の命運や如何に

いや、死なないよ

( ^ | ^ ; )

## 小心者心配する(前書き)

毎行き当たりばったりで書いてます。ストーリーがおかしくならないよう気おつけてます。

p ( q , ' ) p  
( q , ' ) p

## 小心者心配する

夜になった。

公孫賛様の部屋の前で俺は立ち往生している。  
というのも恐怖で動けなかったからだ。

息が途切れて苦しい、肺に酸素が上手く送れてないからだ。

颯真（逃げたい、でも）

逃げることは出来ない。

公孫賛様のためにも誤解は解かないと。

俺は震える手でドアノブを握り締めた。

?? 「少々落ち着かれてはいかがか？」

颯真 「わぎゃああああああっっっ！…！…！」

人々が寝静まる中、一人の小心者が叫び声を上げた。

## 第七話 小心者心配する

?? 「そこまで驚かずとも良いでしょう」

颯真「急に後ろから話かけられりゃ誰でも驚きますよ!」「いきなりなにすんだこの人!!」  
心臓止まるかと思っただぞ!?

?? 「いや失敬。興奮して周りが見えておられぬ様子だったのでな、それならば近くでと思い話しかけたのだが・・・」

俺を驚かせた女は申し訳なさそうな声を出している、だが・・・

??「あれほどまでに大きな声を出すとは思いませんでした、いや  
はや本当に申し訳ない」

顔が嬉しそうにニヤけてんだよコノヤロー!!

目の前の女は青い髪をし、赤色の目に、蝶があしらわれた白い着物を着ている。

つーか趙雲だ

この間公孫贇様の所に将が仕官したと聞いた時はもしかして思ったが

颯真（やっぱり居やがったか）

趙雲子龍、文武両道の将で恋姫無双では北郷軍に所属していた猛将  
なんだが・・・

趙雲「ふふっ、どうかされたか？私を見つめだして」

趙雲は艶びやかな目で見つめ返した。

性格に難があり人をからかうのが好きな所があるんだ！

颯真「何もこんな時に出逢わなくても・・・」

颯真「いえ何でも、私は簡憲和と言います。・・・お名前を伺っても？」

初対面の人の名前を知ってるなんて怪しいからな

趙雲「我が名は趙子龍と申す以後よしなに」

颯真「それで？貴殿は一体私に何用で話かけられたので？」

趙雲「いや何、一つ忠告をと思ってな」

颯真「忠告？」

趙雲「いや何、伯珪殿は私に及ばないまでもなかなかの武をお持ちでな・・・」

は？

趙雲「押し倒すつもりならもつと鍛え上げてからの方が良いぞ」



颯真「何の話ですか!？」

どんな勘違いすりゃあそんな風に見えるんだよ!!

趙雲「違うのか?しかし、おなごの部屋の前で息を荒げる様はさながら、獲物に飛びかかる狼の様でしたぞ」

うっ、確かにそう見えなくもないけど・・・

颯真「違います趙雲殿、私は」

趙雲「!?ほお」

すると趙雲は目を細めた。

あれ、なんか、急に雰囲気・・・

趙雲「私は姓と字は言ったが名は申してないぞ。一体どこで我が名を知った」

趙雲が獲物を見つけた様な目をしてゆっくりと近づいてくる来る。

や、やべえええ。バカした!!、やっちゃいけないことしちゃったよ!!!

どろじよう。  
どろすれば良い!?

趙雲「さあ、答える簡憲和」

こうなったら・・・

颯真「御免!」

逃げよう。

趙雲「あ!?!、こら!待て!!!」

俺は公孫贇様の部屋へと駆け込んだ。

公孫贇「ど、どうした、急に部屋に入ってきて」

颯真が来るのを座って待っていた公孫贇は、颯真が駆け込んで来たことに驚いた。

部屋に入った彼は冷や汗を流してどこか疲れた様子だったからだ。

颯真「いえ、なんでも!

それよりも早く始めましょう!?!」

颯真は興奮した表情で言った。

公孫賛「その前に落ち着こう。な？」

公孫賛は少し怯えた。

あれから少し経ち、落ち着いた俺は姿勢を正して跪いた。

公孫賛「落ち着いたようだな。それでは、罪状を述べる」

ついに来たか、一体俺どうなるんだ・・・

公孫賛「罪状は・・・」

斬首、牛裂き、火炙り、どんな罪で裁かれるんだろう・・・

公孫賛「偽証罪！」

ん？

今なんて・・・

公孫贇「簡憲和を是よりげんこつ一回の刑に処する！」

は？

どういうことだ？

何て言った？

落ち着け、整理しよう。

俺は罪人で罪はげんこつだ・・・は？

ゴッ！！

いってえええええええつつっ！？

考え事をしている俺の頭に公孫賛様は、思いっきりげんこつを落としました。

颯真「アガツ・・・グウウウ・・・」

颯真は頭を抱えてうずくまった。

公孫賛「イテテ。お前頭硬いな」

公孫賛は痛そうに手を、ふーふーした。

公孫賛「反省したか？もう一回は勘弁して欲しいぞ」

颯真「あのー!!」

颯真は涙目になりながらも聞いた。

颯真「これってどういふことですかー!？」

公孫賛「どう、とは?」

公孫賛は不思議そうに聞き返した。

颯真「偽証罪ですよ！？あと、げんこつも！！」

公孫賛「なんだそんなことか」

颯真「そんなことって・・・」

公孫賛「げんこつは罪の重さで私が決めた。そして偽証罪は・・・」

公孫賛「お前が私に嘘をついたからだ」

颯真「はい？」

騙したじゃなくて？

公孫賛「ああ、《私がやりました》と言う嘘をな」

俺は一瞬思考が停止した。

颯真「な、なんで、どうして？」

すると公孫贇は得意げな顔をした。

公孫贇「これでも一太守なんだ。これくらいの嘘分かって当然さ」

颯真（・・・嘘だろ）

公孫贇「そもそも偽装兵に関しては私は許したのだから、罰する訳ないだろう」

うっ、確かにそうだな。

公孫贇「それに首謀者もたぶんだけど分かってる」

颯真「あ、いやそれは・・・」

公孫贇「大丈夫。何もしないよ」

颯真「あ、ありがとうございます」

良かった。じゃないと俺が庇った意味無くなっちゃうもの。

公孫賛「しかしお前も無茶するなあ、私だから良かったけど普通なら斬首だぞ？」

公孫賛は顎に手を宛ながら聞く。

颯真「それは、その」

公孫賛「ん」

颯真「公孫賛様が頑張っておられたので・・・」

公孫賛「・・・え？」

公孫賛は呆気に取られた

颯真「公孫賛様と桃香様は無為の親友。しかし、その桃香様に裏切りと取れる行為をされたと思った公孫賛様は、傷ついておられました。」

颯真「ですが公孫賛様は耐えようとしてました。

親友の裏切りを許そうとしてました。

それがかわいそうで・・・」

公孫賛「・・・なぜ、そう思ったのだ？」



颯真は公孫賛の目を見つめた

颯真「目が・・・悲しそうでした・・・」

公孫賛「・・・・・・・・」

颯真「あの、頑張るのは良い事ですが、自分の気持ちを押し殺して  
までする必要はないと思うんです、だから！」

もっと力を抜いて下さい」

俺は懇願するように頭を下げた

公孫賛「・・・憲和は変わっているな」

颯真「変わって、ますか？」

公孫賛「ああ」

断言された・・・

公孫賛「心配しなくても、あれくらいでへこんだりしないから、安心してくれ」

颯真「なら、良いのですが」

公孫賛様が言うのなら大丈夫だろう。

俺は納得することにした

公孫賛「・・・ありがとう」

颯真「え？」

公孫賛「憲和のおかげで楽になった・・・ありがとう」

公孫賛は嬉しそうに微笑んだ。

颯真「い、いえそんな大したことじゃありませんから！」

びっくりした、公孫賛様って笑うと意外と・・・

公孫賛「さて、夜も遅い、明日に備えてゆっくり休め」

窓の外を見ると月が綺麗だった。

今夜は満月のようだ。

颯真「はい、それでは公孫贄様おやすみなさいませ」

公孫贄「ああ、おやすみ」

俺は部屋へと帰った。

side 公孫贄

ふう、今日はいろいろあって疲れた。

私は体をほぐすように伸びをした。

しかし、まさか桃香が助けに来てくれるとは思わなかったな

公孫贄「まあ、ちょっとした問題は起こったけど」

たぶんあの北郷とか言う男の入れ知恵だな、桃香じゃあんな策思い

つかないだろうし

公孫賛「・・・綺麗だなあ」

今宵は月が綺麗だ、寝る前に少し呑むことにしよう。

公孫賛「それにしても簡憲和か・・・

変わった男だな」

世間から良い人と言われる私はよく我慢をしてしまう所がある。

うちの文官達がいい例だ。

文字は読めるが書けない奴、読み書きは出来るが内容が理解できない奴がうちには沢山いる。

仕方ないので太守である私が一番頑張つてしまい結果、今となっている。しかし・・・

公孫賛「始めてだったな、私のこと心配してくれた人は」

そう始めてだった。自分で言うのもなんだが私は優秀だ、なんでも出来る。

だが裏を返せば花がないと言える。

小さい頃からそれが嫌いだった、なんとかしようとして一生懸命頑張った結果。

私塾では優秀な成績を収めることが出来た。

しかし花は咲かなかった。

次に太守になることが出来た。

多くの戦を経験して異民族や盗賊達を討伐しついに白馬長史と言つ異名まで付いた。

私にも花が咲いたと思った

公孫賛「やった！これでもう私を優秀なんて言つ奴はいないぞ！」

しかし現実は厳しかった。

私に異名が付こうとも周りの対応は変わらなかった。

世間からすれば私に今更異名が付こうがどうでも良かったらしい。

異名が付こうが付くまいがどっちにしろ私が優秀なのは変わらないからだ

違う

私が優秀なのは私が頑張ったからだ！初めから優秀だったわけじゃない！

違う

私塾の時もそうだ！一番には成れなかったけど、それでも頑張ったんだ！

違う

なんで皆私の優秀な所ばかりを見るの？  
なんで皆私の頑張りを見てくれないの？  
なんで

私には花がないの？

結局私は頑張ることにした、私にはこれしかないからだ。  
多くの仕事をこなしているうち、世間からはこう呼ばれてた

良い人と

あれだけの頑張りで褒めてるんだか貶してるんだかよく分からない  
《良い人》と言う評価。

私は落胆した。

しかし、今日始めて私の頑張りを認めてくれた人が現れた！

公孫賛「簡憲和」

嘆くように漏れた彼の名を今一度確かめる

公孫賛「簡憲和、私を見てくれた人」

顔が熱いのは酒のせいではないだろう、もっと別の、例えば……

公孫賛「恋、か」

私は火照ったからだを冷まそうと夜風に当たりに外に出た。



小心者心配する（後書き）

白蓮さんは普通と言うよりも優秀と言うのが作者の見解です。

今回は一番にはなれないけど優秀であるが故に頑張りを見てもらえない白蓮さんの心情を書いてみました。

あとついに星初登場！

二人共この口調で合ってるかな？（・―・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7262x/>

---

小心者が逝く

2011年10月26日13時04分発行